

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3597820038		
法人名	社会福祉法人 阿武福祉会		
事業所名	グループホームいらお苑		
所在地	山口県阿武郡阿武町大字福田下1358番地1		
自己評価作成日	令和2年9月25日	評価結果市町受理日	令和3年2月8日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度ホームページで閲覧してください。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 やまぐち介護サービス評価調査ネットワーク		
所在地	山口県山口市吉敷下東3丁目1番1号 山口県総合保健会館内		
聞き取り調査実施日	令和2年10月8日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・個々のニーズを把握するよう努力し、ケアに繋げている。 ・農業経験者も多く、畑を借りて野菜作りをしたり、苑内でも、プランターを使って花や野菜を植え、世話をしている。 ・現在は、地域の人が自由に入出入りできる予防拠点えんがわは使用できないが、併設している小規模多機能や支援ハウスの利用者とは日々関わりを持つことができ、馴染みの人との関係作りが継続できている。 ・年2回計画している旅行、地域の行事等は中止になり、参加することはできていないが、馴染みの場所へのドライブ、桜やひまわり、つつじに紫陽花などの花を見に行くなど、外出の機会を持つようにしている。 ・手芸にも力を入れ、マスクや手掛け袋などを手作りしている。その際も、小規模の利用者と一緒に行かない、他の人との関わりも大切にしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>天候が良ければ、いつでも、どこにでも利用者の希望にそって、戸外の行きたい所に出かけられるように支援しております。周辺の散歩や近くにある農協や福祉の里に食材の買物、梅や桜、水仙、つつじ、紫陽花、藤の花、バラ、ひまわり、紅葉等、季節の花見、地域行事への参加、近郊の萩市、津和野等へのドライブ等、利用者の希望に添って、馴染みの場所に定期的に出かけられて、そこで出会う地域の人との関わりを大切にしたい外出支援をしております。利用者一人ひとりのできる能力を尊重され、食事づくりやおやつづくり、保存食づくり、野菜づくり、手芸作品づくり、マスクづくりなど、本人の趣味や特技、希望や意向に合わせて、日常の暮らしの中で発揮できるように個別支援に取り組まれています。手づくりの手芸作品は「いらお苑祭り」時に展示販売をされる中で、地域の人との交流が生まれています。事業所便り、事業所行事や職員紹介等を読みやすく、関心を引くような構成にされ、全戸配布をされて地域とのつきあいが深まるように努めておられます。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～56で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
57	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:24. 25. 26)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	64	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:10. 11. 20)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
58	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:19. 39)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	65	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2. 21)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
59	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:5)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
60	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38. 39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員は、活き活きと働いている (参考項目:12. 13)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:50)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:31. 32)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
63	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:29)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所内に掲示して、常に目に入るようにし、実践できるようにしている。 1年に1度は、理念について話し合い、再確認及び再検討し、より良い実践ができるようにしている。	地域密着型サービスの意義をふまえた事業所独自の理念をつくり、事業所内に掲示している。年度当初の職員会議では理念を確認し、毎月のカンファレンス時には、利用者らしい生活ができる介護計画になっているかを話し合い、理念を共有して実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、行事やお祭りの中止が多くなっている。その中で、地域の小学校の運動会や、小学生の施設訪問などで交流を持つことができている。小規模デイの利用者とは、常に交流が持てる状況である。	自治会に加入し、事業所便りを毎月、地区各戸(230戸)に配布している。事業所と併設の事業所(小規模多機能型居宅事業所)は災害時の福祉避難所としての役割を担っている。職員は、自治会主催の草刈りに年2回参加している。併設事業所にある地域の予防拠点「喫茶えんがわ」の運営を担当し、毎月、利用者と職員と一緒に参加して、事業所や認知症の理解が深まるように努めている。利用者は、小学校の鯉のぼり運動会や地域で開催している祭り(さん3ふるさと祭り、大農業祭、八幡様祭り)に参加している他、福祉スポーツ大会では競技に参加して交流をしている。「さん3ふるさと祭り」では手づくり製品(ポーチ、手提げ袋、アクリルたわし、ハンガータオル、牛乳パックの皿、鍋つかみ)をつくって販売しているなど、利用者は職員と一緒に出かけ交流している。併設事業所と合同で実施している「いらお苑祭り」には、地域の子どもから大人まで125名の参加者と一緒に神楽の見学やバザー(うどんや炊き込みご飯、鯛焼き)の利用、手づくり作品の展示販売をして楽しく交流している。毎月開催している「喫茶えんがわ」に来訪の人や支援ハウスの利用者、介護予防参加者、ボランティア(歌、大正琴、ハンドベル)で来訪の人と交流している。近くの農協や福祉の里での買物時、散歩時に出会う地域の人と挨拶を交わし、花や野菜の差し入れがあるなど、地域の一員として日常的に交流している。小学生(1年生から6年生)の高齢者とのふれあい体験を受け入れており、利用者手づくりのマスクとマスクケースをプレゼントして交流している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会において、認知症に関して話をする機会を持っていたが、今年度は、会議を実施できておらず、話をする機会は、全く持っていない。		
4	(3)	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	評価内容を各自で確認し、理解するとともに、課題の改善に取り組み、より良い事業所となるよう取り組んでいる。	管理者は、職員に評価の意義を説明して、全職員に自己評価をするための書類を配布し、記入してもらいまとめている。自己評価は職員にとって、日々のケアの振り返りとなっており、コロナ禍の中で地域との交流や外出が十分できないことにジレンマを感じている。前回の外部評価結果を受けて、目標達成計画を立て、災害時の福祉避難所としての役割を果たせるよう連絡網伝達訓練や誤嚥の予防に取り組んでいるなど、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。	
5	(4)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年は1月に実施したのみで、以降の会議は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い実施できておらず、サービス向上に生かすことはできていない。	会議は、併設事業所(小規模多機能型居宅事業所)と合同で開催している。(今年は、コロナ感染予防のため3回の開催となっている。)利用者の状況や行事予定、活動状況、事故、ひやりはつと報告、外部評価結果報告、テーマを決めての勉強会(感染症について、ケアプラン)の後、話し合いをしている。参加者からは、喫茶えんがわの利用についてや利用者との関わりを持ちたいこと、手づくり作品の販売箇所の拡大等について意見があり、サービス向上に活かしている。	
6	(5)	○市町との連携 市町担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町担当者ととの連絡は、管理者が行なっている。	町担当者とは運営推進会議時や電話で情報交換を行い、申請内容や手続き、運営上の疑義について相談して助言を得るなど、協力関係を築くように取り組んでいる。地域包括支援センター職員とは運営推進会議時に情報交換を行い、連携を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間以外施設の施錠はしておらず、ベッドは、柵のない家庭用の物を使用している。施設内での勉強会を通して、身体拘束の具体的な禁止行為の学習も行い、ケアも実践している。	職員は「身体拘束防止マニュアル」を基に、併設施設との合同勉強会で学び、身体拘束や虐待の内容と弊害について正しく理解している。職員による身体拘束適正化委員会の設置を検討している。管理者は、合同勉強会や職員会議の中で、接遇や言葉づかいについて指導している。スピーチロックに気づいた時には管理者が指導し、職員間でも注意合っている。玄関には施錠をしないで、外出したい利用者があれば、職員と一緒に出かけているなど、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
8		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会を実施するとともに、虐待を見逃すことがないようにしている。職員の健康状態にも気を配り、体調不良やストレスから虐待に繋がらないよう注意している。		
9		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関しては、苑内研修等で学ぶ機会を持っているが、活用する場面は今現在はない。		
10		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、十分な説明を行なっている。		
11	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等からの相談、苦情の受付体制や処理手続きを定め周知するとともに、意見や要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者や家族からの要望や意見は、職員間で話し合い、運営に反映できるよう努めており、運営推進会議で公表することとしている。苦情に関する受付体制は、わかるように掲示している。	相談や苦情の受付体制、第三者委員、公的機関窓口等を明示し、処理手続きを定めて、契約時に家族に説明をしている。家族からは面会時や運営推進会議参加時、行事(いらお苑祭り)参加時の他、電話でも意見や要望を聞いている。意見や要望は日常記録簿に記録して職員間で共有している。毎月、家族宛に事業所便りと一緒に担当職員から、利用車の日常の様子を記録して送付し、意見や要望が言いやすいように工夫している。家族からは毎月の情報提供に対する感謝の気持ちが多く寄せられている。個別ケアに関する要望にはその都度対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議等で、意見を聞く機会を設けているが、具体的な提案はない。また、日常業務の中での気づきも、その都度言えるような環境作りに努めているが、意見は出にくい状況である。	管理者は、朝の申し送り時や月1回の職員会議時、カンファレンス時、合同勉強会の中で、職員からの意見や要望を聞いている他、係り業務(研修、広報、行事等)の中でも聞いている。管理者は職員の表情や様子を見て、自ら言葉をかけて、気軽に相談や意見が言いやすいような雰囲気づくりに努めている。職員からは入浴時の2名介助についてやコロナ禍の中での外出の工夫等の意見や提案があり、運営に反映している。	
13		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員業務に、適切な評価をしている。		
14	(9)	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修に関しては、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、積極的に希望を募ってはいない。年1回行なっている法人全体の研修も、今年度は未定である。苑内研修に関しては、月に1度程度実施している。	外部研修は、職員に情報を伝えて、希望や段階に応じて勤務の一環として受講の機会を提供している。今年度は、第8回山口県サービス評価推進会議の「グループホームの災害対策」に1名参加している。受講後は復命書を回覧し、資料はいつでも閲覧できるようにして全員が共有している。併設事業所との合同勉強会は年間計画を立て毎月1回、管理者や職員が講師となって、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、嘔吐物処理)やケアプラン、接遇(言葉づかい、コミュニケーション)、防災(風水害、土砂災害)、誤嚥性肺炎の予防、認知症(中核症状と行動、心理症状)を実施している。当日の欠席者には資料配布をしている。法人では資格取得に関する勤務等への配慮がある。	
15		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流は持っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
16		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	一緒に活動したり、話をする機会を積極的に作り、本人の思いをくみ取る努力をしている。困りごとに関しては、入居者の目線にたち、じっくりと話を聞く機会を持つことで、信頼関係を築きながら、一緒に解決策を考えるようにしている。		
17		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の要望を聞く時間を持ち、信頼関係が築けるよう努力している。入所後も、遠慮なく意見が言える環境づくりに努めている。		
18		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人及び家族の思いを聞き、利用していたサービス事業者の意見も聞きながら、必要としている支援の把握をしている。		
19		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	畑仕事や漬物作り、柏餅の葉の採取等では、人生の先輩としての知識を生かし、職員が教わりながら行なっている。日々の生活の中でも、できることは一緒に行なう機会を持つようにしている。		
20		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、面会禁止の措置を取らざるを得ない状況であり、昨年ほどは、家族との交流が持てていない。1ヶ月に1度は、引受人及び引受人以外の家族に、近況報告の手紙で様子を知らせている。電話での交流も行なうなど、家族との絆を大切にし、ともに支える関係作りをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21	(10)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出も消極的になってはいるが、馴染みの場所へのドライブ、お盆の墓参り、地区の運動会の観覧などに出かけている。小規模の利用者との交流は、日々行っており、馴染みの関係が途切れないようにしている。	家族の面会や親戚の人、近所の人、知人の来訪がある他、電話や手紙での交流を支援している。事業所から、馴染みの美容院の利用や馴染みの商店(農協、福祉の里)での買物、馴染みの地域で開催の祭りやイベント(運動会、年末の歌おう会)、馴染みの地域へドライブ、仏壇を拝みに一時帰宅等、馴染みの場所に出かける支援をしている。併設施設にある「喫茶えんがわ」に毎月、利用者と職員が一緒に出かけて、利用している馴染みの地域の人と交流している。家族の協力を得て、法事、墓参、外食、一時帰宅、外泊等、馴染みの人や場所との関係が途切れないように支援に努めている。	
22		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	自宅は同じ地域にあり、顔見知りではあるが、昔ながらの関係性を意識しながら、席の配置をしている。皆で一緒に作業をしたり、裁縫の得意な入居者が、ボタン付けや服のほころびを直してあげることもある。時には意思疎通のできない時もあり、その際には職員が間に入るようにしている。		
23		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	実例なし。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
24	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お世話になっているからと、遠慮している部分もあり、日常生活の様子や、職員・入居者同士の会話の中から、できるだけ本人の希望や意向を把握できるよう努めている。また、職員間で話す機会も持つようにしている。	入居時には基本情報を活用して、前利用施設や本人、家族から生活歴や趣味、特技、食事の好き嫌い、本人や家族の希望を把握して思いの把握に努めている。日々の関わりの中で利用者に寄り添い、ケアプランに関連するものと一般的な事柄に分けて、表情や発した言葉、行動、状況を日常記録簿に記録して思いの把握に努めている。把握が困難な場合は職員間で話し合い、本人本位に検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴に関しては、入居時やサービス利用者からの情報で、ある程度把握している。家族から話を聞き、本人とも話をする機会を作りながら、馴染みの暮らし方の把握に努めている。		
26		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の過ごし方や心身の状態など、日常記録簿やケアプラン経過表、朝のミーティングなどで、現状を把握している。		
27	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意向を元に介護計画を立てるようにしている。苑での生活が、より良いものとなるように、職員間で話しながら、見直しや変更を行なうなど、現状に即したものとなるように努めている。	計画作成担当者と利用者を担当している職員が中心になって、毎月1回、カンファレンスを開催し、本人の思いや家族の意向、主治医や看護師の意見を参考にして、職員全員で話し合い、介護計画を作成している。3ヶ月毎にモニタリングを実施し、6か月毎、に直しをしている。利用者の状態や家族の意向に変化があればその都度見直し、現状に即した介護計画を作成している。	
28		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常記録簿や経過表で、毎日の状態や実践したこと、感想を記録に残している。朝夕の申し送りや月に1度の会議を通して、情報の共有に努め、介護計画にも反映させている。		
29		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自宅の仏様を拝みたい、家族の写真が欲しいなどの希望には、家族の協力も得ながら実現できるようにしている。その時々生まれるニーズに、できるだけ対応するように努めている。		
30		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	個々の地域資源の把握が、すべてできているとは言えないが、馴染みの場所へ出かけ、美容院にも行くなど、地域の中での暮らしを楽しめるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31	(13)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関の医師に回診をしてもらっており、必要であれば検診を実施している。また、体調不良の際には、速やかに受診している。家族対応で、希望の病院受診も可能であり、職員が対応し受診した場合は、家族に結果を報告している。	本人や家族の納得を得て、協力医療機関をかかりつけ医とし、月1回の往診がある。他科受診は家族の協力を得て受診支援をしている。結果は日常記録簿や申し送りノートに記録して職員間で共有し、家族には電話で報告をしている。夜間や休日には、事業所の看護師に相談し、協力医療機関と連携して、適切な医療を受けられるように支援している。	
32		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調管理に努め、いつもと違う様子が見られた時などは、速やかに看護師に報告し、指示を仰いでいる。		
33		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	実例なし。		
34	(14)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期に関する話はできていない。	入居後2年未満の利用者であることから、重度化した場合や終末期についての事業所でできる対応についての具体的な話し合いはできていない。家族、医療関係者との意向の確認や職員全体での話し合いを行い、重度化した場合の方針を共有する必要がある。	・重度化した場合の方針の共有
35	(15)	○事故防止の取り組みや事故発生時の備え 転倒、誤薬、行方不明等を防ぐため、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組むとともに、急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている。	個々の状態の変化を職員間で共有し、ヒヤリハットを活用する等事故防止に努めている。緊急時の対応については、苑内研修などで繰り返し学習している。初期対応は、苑内研修時に、一緒に行なう予定にしているが、なかなか実施できていない。	事例が発生した場合は、ヒヤリハット報告書、事故報告書に発生状況や内容、予防策を記録して回覧して周知すると共に、利用者の日常記録簿に記録している。カンファレンス時に再度検討して個々の事故防止に努めている。「事故、緊急時対応マニュアル」をつくり、合同勉強会の中で感染症についてや誤嚥予防について学習しているが、初期対応についての実践研修は実施していない。	・救命救急法やAEDの使用方法についての研修受講 ・全職員での応急手当や初期対応の定期的訓練の実施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年間を通して、火災(夜間、日中想定)訓練、連絡網伝達訓練を実施し、全職員が、いざという時に慌てることなく行動できるようにしている。事業所が福祉避難所になっており、地域の中で、役割が果たせるよう努めている。	年2回、消防署の協力を得て、併設の事業所と合同で夜間や日中の火災を想定した、通報訓練、避難訓練、消火訓練、防災機器の使い方について、利用者も参加して実施している。事業所は地域の福祉避難所としての役割を担っており、外部評価機関主催の第8回サービス評価地域推進会議「グループホームの災害対策」の研修に参加し、その役割が果たせるよう取り組み、運営推進会議の中で災害時の地域の協力をお願いしているが、協力体制を築くまでには至っていない。非常用食品は備蓄している。	・地域との協力体制の構築
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
37	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	話をする際には、言葉使いも友達感覚になってしまう場合もあるが、人生の先輩として、常に尊敬の気持ちを持ち、一人ひとりの人格に応じた言葉使いや話し方をするよう努めている。	職員は合同勉強会(認知症についてやコミュニケーション、接遇、言葉づかい)や管理者の「排泄、入浴時の羞恥心に配慮した言葉かけやトーンの大きさに配慮する」という指導を通して、人格の尊重とプライバシーの保護について学び、常に尊敬の念を持って言葉かけや対応をしている。不適切な場合は管理者が指導している。個人情報取り扱いに留意し、守秘義務を徹底している。	
38		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	希望や思いを、自ら口にする事は少ないが、会話などから把握できるように努め、自己決定できる機会を作るようにしている。判断ができない時は、2つの選択肢から選ぶなど、できるだけ本人が意思表示できるように努めている。		
39		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	限られた職員体制の中で、個々のペースに合わせていくことはできないこともあるが、できるだけ希望に添うように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	整容や身だしなみなど、不十分な時やできない時には、声掛け及び介助をしている。衣類に関しては、本人に任せているが、行事や外出時、季節に合っていない場合などは、声掛けをしている。本人のこだわりもあり、難しい場合もある。馴染みの美容院への送迎も行なっている。		
41	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	日々行なうことはできていないが、食材の下処理や漬物作り等を行なっている。餅つきや、おはぎに柏餅作り等、季節の行事を大切にしながら楽しみにつなげている。定期的にお菓子作りもしている。テーブル拭きや下膳、トレー拭きなどの片付けも行なっている。	食事は三食とも、事業所の畑で取れた旬の野菜(ネギ、南瓜、胡瓜、ピーマン、茄子、トマト、オクラ、枝豆)や差し入れの野菜を使って利用者と職員と一緒に食事づくりをしている。食欲が高まるように季節感を大切にし、食器や盛り付けの工夫をして提供している。利用者は野菜の下ごしらえや(芋や蒨の皮剥き、豆のすじ取り)テーブル拭き、下膳、トレー拭き、食器洗いをする他、おやつづくり(おはぎ、柏餅、ホットケーキ、団子、ショートケーキ、ロールケーキ、プリン)では、計量、ハンドミキサーを使う、丸める、焼く、ひっくり返す、ケーキのトッピング、保存食づくり(梅干し、白菜の漬物、切り干し大根)では、切る、干す、漬けるなど、できることを職員と一緒にしている。利用者と職員は同じテーブルについて同じものを食べている。誕生日には利用者の希望の献立にしている。弁当をつくって海や季節の花を見に出かけたり、ドライブに出かけている。祭りやイベントでは焼きそばや焼き鳥等の戸外食、外食、季節行事食(おせち料理、節句の寿司、端午会食、土用の鰻、ソーメン流し、夕涼み会、名月会食、年越しそば、餅つき、雑煮)の他、家族との外食等、食事が楽しみなものになるように工夫して支援している。	
42		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	好みや食事量に関しては、本人の希望を聞くとともに、食事の様子を見ながら調整している。いつもと違う場合や、摂取量が極端に少ない場合等は、記録に残し経過観察している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	必要な入居者には、毎食後声掛けや介助を行なっている。口腔ケアができておらず、介助を嫌う入居者も、根気強く声掛けを行なうことで習慣化している。自ら行なう人に関しては、正しくできているか、確認はできていない。		
44	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	自立している入居者がほとんどである。時々尿や便失禁が見られるが、その際には介助している。自分で処理する人もおり、居室内に汚染した衣類をしまい込んでいる場合もある為、衛生面に注意している。歩行困難な方でも、トイレでの排泄ができるよう支援している。	排泄記録を活用して、一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレでの排泄や排泄の自立ができるように支援している。失敗があっても本人が傷つかないように、周囲にも気づかれないように、その対応や言葉かけに留意して、排泄の自立に向けた支援を行っている。	
45		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎食野菜を摂れるように意識し、乳製品を取り入れ、十分な水分摂取も行なうようにしている。毎日体操を行なうなど、体を動かす機会も持つようにしている。排便困難な場合は、医療との連携を図りながら、適切な薬の処方をお願いする場合もある。		
46	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴についての希望は聞かれないが、体調を確認しながら、週3回午後3時以降を入浴時間としている。汗を掻いた時など、必要な場合はその都度対応している。	入浴は15時から17時までの間可能で、本人が希望すれば毎日入浴できる。順番や湯加減、好みの石鹸、季節の柚子湯など、利用者の希望に合わせて、職員との会話を楽しみながら、ゆったりと入浴できるように支援している。入浴したくない人には無理強いしないで、時間を変えたり、職員の交代、言葉かけの工夫をして対応している。利用者の状態に合わせて清拭や足浴、シャワー浴、部分浴等、個々に応じた入浴の支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の活動や体操、レクリエーションなどで、適度に体を動かし、安眠につなげるようにしている。朝食と昼食後には、休憩時間も持っている。また、1週間に1度のシーツや枕カバーの交換、1ヶ月に1度の掛布交換など、清潔な寝具で休めるよう配慮している。		
48		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の一覧表を貼り、常に目に入るようにしている。服用前には、声に出して名前を確認し、誤薬することなく、確実に飲めるよう支援している。		
49	(21)	○活躍できる場面づくり、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	縫物や畑仕事等、生活歴や趣味、得意なことを生かした活動ができるよう支援している。日々のレクリエーションや、小規模利用者との合同運動会、夕涼み会など季節にあった行事も企画しながら、気分転換を図り、楽しみにつなげるようにしている。	掃除(掃除機を使う、モップで床を拭く)、玄関の掃除、カーテンの開閉、リネン(シーツや枕カバー)交換、布団を干す、洗濯物干し、洗濯物たたみ、洗濯物の収納、花を生ける、花瓶の水を換える、食事の下ごしらえ、テーブル拭き、下膳、食器洗い、トレー拭き、おやつづくり、プランターの水やり、草引き、プランターに花や野菜を植える、畑の草取り、野菜の収穫(ごうや、ミニトマト、胡瓜、オクラ、トマト、枝豆、茄子)、繕いもの、雑巾を縫う、編物、展示即売品づくり(牛乳パックでコップ皿、ポーチ、手提げ袋、アクリルたわし、ハンガータオル、鍋つかみ)、テレビ視聴、本や雑誌、新聞を読む、写真集を見る、折り紙、ぬり絵、切り絵、貼り絵、書初め、メモ日記をつける、歌を歌う、カラオケ、秋の壁画づくり(コスモスとリスと桔梗)、かるた、トランプ、坊主捲り、カレンダーづくり、風船バレー、ボール遊び、ボーリング、オセロ、もぐらたたき、ジェンガ、なぞなぞ、しりとり、間違い探し、パズル、ラジオ体操、リハビリ体操、テレビ体操、口腔体操、季節行事(地域の祭りやイベント、いらお苑祭りでの展示販売、敬老会、運動会、夕涼み会)、地域行事の見学、喫茶えんがわへの参加、小学生の来訪、ボランティアの来訪、外出、外食等、楽しみ事や活躍できる場面づくりをして、利用者が気分転換を図り、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	墓参りや自宅の仏様を拝みに行くなど、希望に添った外出ができるよう努めている。また、畑に出かけることもある。コロナ禍であり、近場へのドライブ程度がほとんどになっている。家族との外出は、現在ほとんどできていない。	事業所周辺の散歩や近くにある農協や福祉の里に食材の買物に出かけ、公園やベランダでの外気浴、日光浴、季節の花見(水仙、梅、桜、つつじ、紫陽花、藤の花、菜の花、バラ、ひまわり、彼岸花、紅葉)、ドライブ(地域内、須佐、玉川、奈古、萩、津和野)、初詣、馴染みの美容院の利用、八幡様祭り、大農業祭の見学、福祉スポーツ大会競技参加、いらお苑祭りでの展示即売、手芸の展示会に出かける他、家族の協力を得て、法事や外食、墓参、一時帰宅、外泊等、本人の希望に添って天候が良ければ、できるだけ出かけられるように支援している。、	
51		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族管理がほとんどであるが、預かり金として苑で管理し、希望があれば自由に使うことができる。買い物に行き、自分で支払いをすることもあるが、現在は買い物自体を控えている。少額のお金を自分で管理したり、お金を持つことで、安心できる入居者もおおり、本人に任せている。		
52		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望がある場合は、家族に電話をする支援をしており、家族からの取次もしている。携帯電話を持参している入居者は、居室で自由に会話できるようにしている。手紙のやり取りをしている入居者もおおり、文面を一緒に考えることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は外に面しており、風景を見ながら季節を感じることもできる。1年を通して、快適な環境で生活できるよう、空調等で温度管理をしている。残念ながら、居間は外に面していないが、季節にあった花を飾ったり、行事の写真や皆で作った壁面飾りなどで、心地よい場所となるようにしている。	リビング兼食堂は併設施設との間にある中庭の天窓から差し込む自然光で、日当たりもよく明るい。玄関や洗面台、窓際に季節の花を飾り、中庭のプランターには季節の花が植えてある。廊下の壁面には、利用者と職員が一緒につくった季節(秋)の貼り絵(コスモスと桔梗、リス)が飾ってある。室内には可動式の畳台やソファ、廊下の突当りには窓からの景色が眺められるように椅子が置いてあり、利用者は思い思いの場所で過ごすことができるように工夫してある。対面式の台所からは食事をつくる音や匂いがして生活感を感じることができる。温度や湿度、換気、清潔に配慮して居心地よく過ごせるような工夫をしている。	
54		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同空間で、完全に一人になる場所はないが、天気の良い日には、テラスに椅子を置いてお茶を飲んだり、ソファで、数名で過ごすこともできるようにしている。		
55	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真を飾ったり、鉢植えの植物を置き、自分で管理している。自宅で使用していた馴染みの物や、希望の寝具も持ち込むことができるようにし、居心地よく過ごせるようにしている。	テレビやサイドテーブル、椅子、箆笥、シン、置時計、掛け時計、3段ボックス、整理箱、紙細工道具、観葉植物、菊の鉢、雑誌、新聞、整容道具など、使い慣れたものや好みのものを持ち込み、カレンダーや自作品、自作のテーブルセンターの上に家族写真を飾って、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	
56		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室には名前を掲示し、自分の部屋がわかるようにしている。居室内は、入居者が使いやすいようにタンスの位置などを決め、安全に移動できるよう、環境を整えている。		

2. 目標達成計画

事業所名 グループホーム いらお苑

作成日: 令和 3 年 2 月 5 日

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	34	・重度化した場合の方針の共有	・重度化した場合に、事業所でできることを職員全員で検討し、家族に対して説明できるようにする	・重度化した場合や終末期に、事業所で何ができるかを話し合い明文化する ・運営推進会議を通じて、方針を家族に伝える ・必要に応じて、個別に家族と話し合いをする	令和3年4月1日から 令和4年3月31日
2	35	・緊急時の対応や応急手当、初期対応の定期的訓練の実施	・救命救急法やAEDの使用方法を再確認することができる ・応急手当や初期対応の訓練を定期的実施することで、全職員が理解し実践できる	・毎月の勉強会のテーマに組み込んだり、会議の後の時間などを活用して、応急手当や初期対応について、繰り返し学習をする ・救命救急法やAEDの使用方法に関しては、苑内で研修を行うとともに、消防署に依頼し、講習をお願いする	令和3年4月1日から 令和4年3月31日
3	36	・災害時における地域との協力体制の構築	・火災時の訓練を地域の協力のもと実施し、いざという時、慌てず対処できるようにする ・福祉避難所としての役割を理解し、地域に貢献することができる	・運営推進会議等で、火災時の協力体制について話し合う ・地域住民と合同の訓練を実施する ・福祉避難所としての在り方や役割を、前年度の反省を元に勉強会等で話し合う ・不明な点は行政に確認する	令和3年4月1日から 令和4年3月31日
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。